
流星のロックマン4 ~

?? mystery ~

nasubiboy

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロツクマン4 } ?? mystery }

【Nコード】

N4615Z

【作者名】

nasubiboy

【あらすじ】

地球の危機を3度も救ったロツクマンこと星河スバル。彼が中学生になるころ事件は起きた・・・WAXA調査隊の謎からすべてが始まる。謎の大陸とは？ 闇の組織の計画とは？ すべての謎が解けた時、組織の計画とムー大陸滅亡の謎が解ける！交錯する想いと運命の中でスバルは世界を救えるのか？

記念すべき(?)なすびの一作品目！(流星シリーズ知ってること前提で書いてますんで宜しく)

プロローグ ～WAXA調査隊～（前書き）

始めました

駄文ですんません

これから100話目指して頑張ります

ブローグ ～WAXA調査隊～

とある謎の地……

「こっこれは！あの大陸の遺跡？」

WAXA調査隊のリーダーは言った。

「リーダーこっこれは大発見ですよ！すぐにWAXAへ連絡を」

「ああ、勿論だ、これは人類史に残る大発見だろう。この大陸の発見は人類の発展にとって……」

と、その時……

グラグラグラ ～ ドドドドドドド！！

「リーダーここ崩れます！はやく退避を ～ぐ～ぐあー」

「……ポセイドン？……」

……これはスバルが巻き込まれる大事件の序章だった……

ブローグ ～WAXA調査隊～（後書き）

・
・
・

感想よろしく

中学校の準備（前書き）

やっと、学校終わりました

中学校の準備

ここはコダマタウン、ロックマンこと星河スバルが暮らしている。

「ZZZ・・・ZZZ・・・」

『おーいスバル起きろ!!! 今日スピカモールに買い物だろ!』

叫んでいるのはウォーロック。FM星育ちのAM星人だ。

「うーん・・・っは!いま何時?」

『8時半。約束は9時だぞスバル』

「やば〜い!委員長に怒られる!」

朝ごはん、着替えを風のように済ませ、ギリギリのところまでバス停へ。

「スバル君おそいじゃないの。まあいいわ、それよりゴン太よ!」

この女の子は委員長こと白金ルナ。あだ名のとおり小学校では委員長をやっていた。

中学校へ行ってもやるつもりらしい。

「ゴン太君、また牛丼ですかね。朝から牛丼って」

この小人のような少年は最小院キザマロ。マロ辞典を使いこなす

物知り。

「ははは、違うないね」

と、スバルが笑つてるところで奥から走ってくる人影。あれがゴン太、よく食べ、よく遅刻する。

「ごめん委員長。なんせ朝の牛丼が・・・」

「行くわよ。もう！」

と、一行はスピカモールへ中学校で使う物を買いに行くのだった。

そして…スピカモールについた。

「ふひ〜。まずは教科書のプログラム取りにいこうよ」

「えっ、まずは牛丼」お黙りゴン太！スバル君の言うとおりにしなさい！」「

というわけでプログラムやら、制服やら、靴やら、（ゴン太は牛丼用の紅シヨウガモ）を買った。

「よし買い物終わりね。つぎは・・・」

「委員長！お楽しみのあれですよ」

「そつだぜ！このために朝牛丼食ってきたんだから」

「えっ？なに？なにがあるの？」

「まつまさか！スバル君、ミソラちゃんのライブのチケット持ってない？」

「え〜〜〜〜！今日ライブって聞いてないよ！キザマロ教えてよ」

「スバルはライブなしだな。可哀そうに。」

『ふっドンマイだなスバル』

「うわ〜。ブラザーのくせにわすれるなんて。スバル君」

そしてライブ二時間前、スバルだけ帰宅となった・・・

「はあ〜。ミソラちゃん怒ってるかな？ライブ来てねーって言われてたし・・・」

『お前が悪いな。まあ帰るしかねーだろ』

とスバルは帰宅することになった

中学校の準備（後書き）

長いか？まあいいでしょう

ライブ前・・・(前書き)

ふう、連投で あ、後こころ辺戦闘ないんで

ライブ前……

バス停にスバルがいた時に電話がきた

「ん？だれだろ？ ブラウズ！」

「すくばるくくん！！なんでライブ会場にいないの！来てっ
て言ったよね！」

「この女の子こそトップアイドルで「自称戦うアイドル」、響ミソ
ラ。電波変換でハープノートになる。」

「ごめん！……（忘れてたなんて言えないし、どうしょ？あ、そ
うだ！）ちっチケットが売り切れて てさ……」

「はあ。スバルくん、忘れてたんでしょ……特等席用意して
るってメールしたじゃん」

「えっ、じゃあライブ見られるの……やった〜 今すぐ行く」

「今どこにいるの？できれば楽屋に来てほしいんだけど」

「いま、スピカモールのバス停だからすぐ行くよ」

「うん 早く来てね〜」

というわけでスバルもライブを見れることとなった。

そして楽屋。

「失礼します。あ、ミソラちゃん久しぶり！」

「何が久しぶりよ！ライブ忘れてたくせに！」

「（まずい怒ってる）ごめん！ほんとに」

「ふふっ、怒ってないよ 演技」

「え、怒ってないの。（よかった）」

『おい、ミソラ。お前がいるってことは……』

『何よ人を悪党扱いして、ウォーロック』

『っげ、出たハーブ』

ハーブとは、FM星人でミソラのパートナーである。

「スバル君、あと1時間半くらい時間あるし。モールまわんない？」

「いいよ、（ライブ忘れてた貸しがあるし……どこいく?）」

「うーんと……とりあえずパフェ食べて、それから駄菓子屋に……」

デート気分の二人であった。そしてライブ直前まで飛ぶのであった。

ライブ前・・・(後書き)

次はライブですね

ライブ！（前書き）

戦闘しばらくないって言ってたけど 次やる予定だったんでした
すみません

ライブ！

「み〜ん〜な〜！来てくれてありがとう！盛り上がっていくよ〜」

「委員長始めましたよー！」

「うおー！ー！！！！始まった！！！！ミソラちゃん！！！！」

「ゴン太！うるさい！」

委員長グループは一番前の列。と、言うのもキザマロがチケット発売日前日から店に並んでいたからである。

少し離れて、舞台裏。ここにスバルはいた・・・

「うわ〜。横から見ると違うねー！こんな近くで見られるなんて！」

『そつだな！でも俺は見れないわ・・・』

「なんでロック？」

『いや・・・ハーブが・・・』

『お呼びかしら？いくわよっ』

『いやだ〜！助けてくれスバル！う、ウワ〜』

地球は救えても、ロックを地獄からは救えないスバルであった・・・

そんな時・・・

「ドガン！！！！」

「ばっ爆発？ロック行こう、ってないか？」

『おう、いるぜ。逃げてきた』

「んじゃ行くよ、トランスコード003、シューティング・スター・
ロックマン！」

ウェーブロードに行くと、ジャミンガーがいた。

『所詮クズか、久しぶりの戦闘腕になるぜ！』

「ロックはいつも勝手にウイルス撃退してるじゃん！」

『ロックマンとしての戦闘だよ、ひさしぶりなのは！』

「いくよ！ロック」

『おう！』

ライブ！（後書き）

次はジャミンガー戦 余裕です

ライブ再開（前書き）

ジャミンガーって流星1しか出てなかった気が・・・

ライブ再開

「ロックバスター！」

ジャミンガーは、不意打ちを食らって大ダメージ、もう瀕死だ。

『スバル、とどめだ！』

「うん。バトルカード、キャノン！」

ジャミンガーはなぜか反撃もせず、ニタツと笑ってデリートされた・・・

「ふう、終わったね」

と、そんな時スバルは周りが見えてなかった・・・

『おい、スバル。お前にしては珍しく目立ちたがったか？ふう』

「えっ？」

そう、スバルはライブのステージのど真ん中で戦闘をしていたのだ。ライブはミソラだけでも

パニックなのに、ロックマンの登場でさらに大変なことに・・・

「~~~~~！！！！世界を救ったヒーローとミソラちゃんの共演だ！！！！」

「~~~~~まずい、ロックどうしようっっ」

『しらねーな、そのまま目立っどけ』

「え〜！僕、目立つの嫌いだって・・・」

そんなヒーローの心情なんて関係なく、ライブはさらに盛り上がっていく。

「みんな〜！今日は世界を救ったヒーローも来てくれたし、最後の曲は一緒に行くよ〜」

ミソラはロックマンにウィンクした。

「(は〜・・・一緒になって何すればいいの?)」

「それじゃー行くよー シューティングスター！」

「~~~~~~~~!!!!!!」

「ウェーブロード 広い世界 夜空見上げ 一人ぼっち キズナ探して ただ 彷徨う」

ウソに怯え 逃げ続けて 孤独にさえ 気がつかずに ただ 歌い続けていたの

星の光が 輝く 私の ココロに 降り注ぐ そして あなたと 巡り合えたんだ

Our band was discovered then

震えて 泣いていた 私を 見つけてくれたね シューティング・スター 暗闇 照らし 駆けてく

その 笑顔に チカラ もらうんだ 怖いものなんか何も無い

振り返らない ずっと 前を見て 光 掴む キミの 笑顔 それが 私の ハートなんだよ

シューティング・スター 暗闇 照らし 駆けてく

会場は最高潮に盛り上がって幕を閉じたのであった・・・そしてライブ終了後。

「委員長グループ」

「なんでスバル君が出てきたのですかね、マロ辞典にも載ってないですよ」

「そんなことより、駄菓子屋行こうぜ委員長。腹が減った」

「マロ辞典とやらに載ってるわけじゃないの、あとゴン太、駄菓子屋にはいかないで帰るわよ」

「え、いかないのかよ」

「いくわよっ」

という感じでコダマタウンへ帰って行った委員長グループだった。

ライブ再開（後書き）

次はスバル視点で

ライブ後（前書き）

ライブ後ですね

ライブ後

くスバル&ミソラく

「ふう、まさかステージのど真ん中に自分がいたとは・・・恥ずかしいよロック」

『仕方ねーだろ　ックック、俺は目立ててよかったぜ』

「まあロックはそうだけど・・・」

と、舞台裏でそんな会話をしていると

「ス〜バ〜ル〜く〜ん　かつこよかったよ」

ライブが終わってすぐなので、ライブ衣装のまま走ってきた。

「あ、ミソラちゃん　おつかれ」

「うん、スバル君のおかげでジャミンガーに邪魔されずに大成功のライブだったよ」

「んじゃ、僕かえ」ちよつと、このあと楽屋に来てくれない？」「

「あ、うん　いいよ。んじゃ先行ってるね」

「うん　すぐ行く　（今日絶対言いつて決めてたんだから　ファイ
ト&ミソラ）」

『ふふっ、今日こそ伝えるんでしょ ミソラ』

「うん・・・ライブよりドキドキするな・・・」

『だいじょうぶよ ミソラなら』

「でっでも、もしスバル君が私のこと嫌いなら・・・まっまたは、委員長のことを好きとか・・・」

と、一人で緊張しているミソラと何も知らないスバルであった。

ライブ後（後書き）

次は告白・・・と言いたいんですが邪魔が入ります

告白・・・失敗・・・(前書き)

どんどん進めたいんだけどなー

告白・・・失敗・・・

（楽屋内）

「ミソラちゃん遅いな〜 なんか話あんのかな〜」

スバルは広めの楽屋にポツンと一人でいた

「なんだろう？いつもより顔が赤かったような・・・」

『ふんっ、俺はわかったぜ、名探偵の俺の推理では・・・ずばり！』

「ずばり？なに」

『ズバリ・・・あいつは・・・「ガチャ！」』

「はあはあ・・・スバル君待った？マスコミとマネージャーに追われてて」

「いや、大丈夫だよ、んでなんの話？」

「あつあのさ、すつスバル君で・・・好きな人いる？・・・」

ここでスバルは少し今回の話を感じずく、ミソラは顔が真っ赤だ

「いついるよ（まさか・・・この展開は）」

「あのさ、わたしスバル君のことが・・・「ガチャ！！！！ミソラいるか？」」

「マネージャーが駆け込んできた、そして

「おいミソラ、ドラマの撮影の時間だぞ！急いで準備しろ！」

「・・・うん（せつかくいいところだったのに）」

「んじゃ、ミソラちゃん 僕は行くね（まさかな）ミソラちゃんが僕のこと・・・）」

『いくか スバル』

と、雰囲気ぶち壊して今回は終わってしまうのだった。

告白・・・失敗・・・(後書き)

マナージャー出てきちゃって台無しですわ

暁の呼び出し（前書き）

冬休み入る前に10話こえたい！

暁の呼び出し

あのあと、スバルは帰宅した。

そして春休みも終わり・・・入学式前日

「あ、暁さんからメールだ、なにになに・・・」

「おお、久しぶりに送ったぞスバル、ちょっと明日来てくれないか？学校には一週間休むってことで」

「え、なんだろ？学校休むまでってことは大事なことかな」

『まあ 行くしかねーだろ』

スバルはこのことを母に伝え許可をもらって入学式から一週間休むこととなった

〈謎の大陸〉

「ポセイドン様、地球で何か動きが・・・」

「まったく、小賢しい・・・」

「先の探索隊と関係があるのでしょうか？」

「あるとしたら、ぶちのめすだけだ」

と言い残しポセイドンは奥の間へきえていった・・・

暁の呼び出し（後書き）

なぞですな

「・・・ポセイドン・・・」(前書き)

なぞめています

「・・・ポセイドン・・・」

（WAXA本部）

「ここひさしぶりだね　あの事件以来か・・・」

『おう、また事件が起きりや暴れられるぜ！』

「いや、平和な方が僕はいいんだけど・・・」

そして中に入る二人であった。

「暁さん！久しぶりです」

「おう、サクサクサク、ひさ、サクサクしぶりだなサクサクサク」

「はい、けがは治ったのですか？」

「おう！このとおり元気だ」

うまい棒を食べ終わった暁は答えた。

『あいつは元気なのか？』

『久しぶりですねロック・・・ちゃん』

アシッドはヨイリー博士のようにしてロックをからかう

『てめー　ぶっ殺すぞ！』

ロックはやはり好戦的なのであった。

「それで、暁さんなんの用事で？」

「ああ、ちょっと司令室まで来てくれ」

〈司令室〉

「この音声を聞いてくれ……」

〈ザ〉……アト……ス……の……ポセイドン？……
・ザザ〉>

「なんですかこれ？ポセイドン？」

「ああ、俺たちもわからん、この調査隊はWAXAっていつても独立してた調査隊だからな」

「独立ってどういうことですか」

「WAXAのなかで、何かを研究してた部隊らしいんだが……何をやってたか上に報告してなかったらしい」

〈ポセイドン〉という言葉しかわからない暁&スバルは調査を進めた

「でも、暁さんなんでぼくがこの調査に？」

「それは……ヒーローだから、じゃだめかな？」

『（暁のヤロー、何か隠してやがる）』

「まあ、いいですけど・・・」

そして、通信の発信源やら、調査隊の部屋を片っ端から調べたが・

「部屋からは何も出なかったそうですよ、暁さん通信は？」

「サクサクサク、今ヨイリー博士が調査中だ」

「シドウちゃん、あ、それからスバルちゃんちよつときて」

ヨイリー博士に呼ばれて行ってみると・・・

「この調査隊はね、通信の発信源をつかませないために鍵をかけてるの」

「いったいなんのために？」

「わからないけど・・・今からじゃもうこの事件は迷宮入りってことね」

「サクサクサクそうですかサクサク」

この調査で一週間経ってしまったのでスバルは調査メンバーから外れた

「シドウちゃん、スバルちゃんがまた地球を救ってくれると？」

「はい、彼は俺が認めたヒーローなんで・・・」

「あの大陸の力は強大だけど・・・スバルちゃんを巻き込むつもり？」

「彼の力がなければ・・・あの大陸とその裏で動いてる組織には勝てないと思ってますんで」

何か知っている二人はまた調査を始めた・・・

（闇の組織）

「Y、次の計画へ移ろう・・・これが私の計画の一步だ」

「ふふふっふ、俺は殺しができりゃいいんだけどな」

「まあそう言っとな、まだお前は動かん。トート、ハイドとやらを呼んで計画をやらせる」

「はっ、Z様了解です」

「おいブラック・・・いやZよ なぜそこまでしてロックマンとやらを狙うんだ」

・・・
この暗い部屋で光っている画面にはスバルとミソラのデータが・

「ふっ、計画は100%の成功率に成るよつに邪魔者は消すもんだ
」・・・」

「卑怯な手を使ってもか？」

「そうにきまっている！」

「ふん、まあ俺には関係ないか・・・」

そしてＹと呼ばれる男は闇へ消えた・・・

「・・・ポセイドン・・・」(後書き)

闇の組織ってなんでしょう？

感想待ってまゝです！

中学校初登校（前書き）

中学校に・・・

「あらすバル君、久しぶり。」

「スバル君、委員長はまた委員長になりましたよ」

「そうか・・・あれゴン太は？」

「おうスバル今来たぜ！」

と、一週間ぶりに委員長メンバーと話すスバルだった。そしてチャイムが鳴りみんな座った

「あれ、僕の横ってだれ？」

「スバル君知らないんですか、この席は・・・」ガラガラ「」

「おーい、みんなー席についてるか？」

とは言ってきたのはどこにでもいそうなふつーの先生（先生たちはストーリーにあまり出ません）

「お、あいつはまた遅刻かーんじゃ出欠取るぞーあ、その前にスバル自己紹介しろ」

「はっハイ」

前に出るスバル

「えーっと、星河スバルです。よろしくおねが」ガラガラガラ、バン！「」

「すいませ〜ん、遅れました あっ！すばるくん！」

と遅れてきたのはミソラだった、スバルは超びっくり&他のクラスメートは落ち着いている

「早く席につけ、まったくアイドルだからっていつも遅刻とは・・・」

そしてスバルの自己紹介もおわり、席に着いた

「ミソラちゃんがこの学校なんて聞いてないよ、キ〜ザ〜マ〜ロ！」

「なっ、僕のせいですか。マロ辞典には前から載ってましたよ」

「ま、いいじゃないの二人とも。宜しくねスバル君」

クラスメートの何人かはなぜスバルがミソラと知り合いなのか分からず、他の生徒はスバルがロックマンだからだと知っていた

・・・そして帰りのホームルームが終わった

『帰ろうぜスバル！』

「うん、ん？メールだ・・・ミソラちゃんからだ」

☆放課後展望台に来て、この前伝えたかったこと言うから・・・

スバルは顔が赤くなった、とうのミソラはというと

「はい、ちょっと待って、今サインするからはいはいおさな〜い」

生徒からのサイン要求で忙しそうだった

「んじゃ、先に行くかロック」

『おう！』

展望台へ向かったのだった・・・

中学校初登校（後書き）

王道を少しいじくってみました（ふつうはミソラが転校生だったの
で）

次は告白です 上手く書けるかな？

告白のまえ（前書き）

ついに十話こえたか

告白のまえ

（展望台）

「ミソラちゃん、まだかな？」

かれこれ1時間待っているスバル

『まあ、あいつもアイドルだしな』

「ロック、この前・・・ズバリ！って言ってたけどミソラちゃんの話ってなんのことかなー？」

『ああ、ズバリ・・・新発売のうまい棒の話だろう』

ドヤ顔をするロックを引いた目で見るスバルはどうすればいいのかわからなかった

「そっそうなのかな？（まさか、ここまでロックが鈍感とは）」

『おう、なんなら俺を名探偵って呼んでくれてもいいんだけど』

『んじゃ、行きましようかKY探偵』

『っげ、ハープーいやだ』

さっよっならロックとばかりに手を振るスバルだった

告白のまえ（後書き）

次こそは告白、ってかロックばかすぎやろ！

告白(前書き)

やっとかゝつかれたわ

告白

くスバル視点く 3時間後（待ち合わせ時間から4時間半）

ロックがいなくなっただけからすこしたったが、ミソラはまだ来なかった・・・

「ハーブが来たからすぐ来ると思ったんだけどな・・・」

「うう、さむつ。ハツハクシヨン・・・まだかな」

すっかり暗くなり、夜空には星が輝きだした・・・

「母さんに遅くなるってメールしておこう・・・」

スバルはドキドキしながらミソラを待っていた

くミソラ視点く

「ううわ～！！！！や～ば～い！！！！」

全力でダッシュするミソラ、なんとあの後マネージャーに呼び出されて・・・

「スバル君怒ってるかな・・・このままじゃ・・・」

電波変換したいとこだが、ハーブにロックの面倒を任せただけで
きなかった

「ぐすつ（スバル君に告白するときに泣いててどろするんだ・・・）」

涙をこすってやっと展望台へ着いた

「（あ、スバル君待っていてくれる）」

（通常視点（スバル視点））

「あっ！ミソラちゃん！」

「ごめんスバル君こんなじかんまで・・・（おこって・・・ない？）」

「（ちょっと意地悪してみるか・・・）遅い！」

「（まずい（ごめん！ほんつとごめん！！！！）」

「ふふふ、おこってないよ・・・んでなに？」

「あっ、あのさスバル君、わっ私とさ・・・待って！！！！」「？」

「ぼっ僕から言っよ・・・」

「（えっ？）」

「ミソラちゃん！前から・・・前から好きでした・・・僕と、付き合っして下さい！」

「私こそ、好きでした・・・よろしくお願いします」

そう言ったミソラは涙目だった、

「んじゃ、夜遅くだし帰ろうよ」

「ぐすっ、うん・・・」

「（泣いてる？）明日また学校で逢おうね」

「ふふっ、明日は土曜日だよ。でもさ、うちこない？スバル君来たことないし・・・」

「ベイサイドシティーだっけ？」

「うん、スバル君の家に迎えに行くから んじゃ〜ね」

「うん」

家に帰る時二人は顔が真っ赤だったとき・・・

告白（後書き）

今日はここまで・・・かな　次も書きたいんだけどな
感想まっています！

ミソラの家に行く朝（前書き）

視点が入れ替わるのに注意

ミソラの家に行く朝

「スバルの家」

「……………」

『ZZZ……ZZZ……』

昨日からドキドキして眠れていないスバル、今は時刻4時

「ふう、寝れないしテレビでも見てるか……」

一階に降りると土曜日でも朝早く起きている大吾&あかね

「あらすバル今日は早いよね」

「おう、スバル……スバルの顔も見れたし行くか！それじゃあ、あかね」

「「「いつてらっしや〜い」」」

大吾はいつも4時出勤していたのをはじめて知ったスバルであった

「（こんな朝早いだね父さん……）」

早めの朝ごはんを食べてふと思ったスバル。と、そこにあかねが

「んで、どつなのミソラちゃんとは？」

「ブ〜っ！！！！（なんで！！？）」

お茶を吹いてしまうスバル、面白そうにあかねは続ける

「あら、凶星だった？」

「（ホントは知ってたくせに）」

顔を真っ赤にしててれるスバル、パンを口に詰め込み、逃げるように部屋へ行った

「ふふっ、スバルも大きくなったわね。前はあんなに小さかったのに」

嬉しそうなあかねだった

くミソラ宅

「（ハープは寝てるみたい）・・・」

『起きてるわよミソラ、寝れなかったんでしょ』

「うん・・・」

今は朝4時半、まだ約束の9時には遠い

「メールしてみるかな、起きたら返信してって（早く来ればいいな）」

そして朝早くにメールをしてご飯を食べた

くスバルの家く

「あ、メールだ・・・なにになに？」

くスバル君の来たれ返信してねくすぐ行くからく

「うん・・・（いましてら迷惑かな？）一応しとくか」

そして着替えなどを済ませていくスバルだった

くミソラ宅く

ミソラは朝ごはん（シリアル）を食べていた

「ん！スバル君今日早いだね！早く行かなきゃ」

山のようなシリアルを一気に口に含んで、いつもの服に着替えてスバルの家へ向かった

くスバルの家く

そして5時になった

「まだ5時ってテレビショッピングやってるんだね・・・」

テレビでは高圧洗浄機のマテリアルウェアを紹介していた

『おい、これセットで15000ゼニ だってよスバル！！！！買お
しぜ』

いいカモのロックを冷たい声で返事をするスバル

「はあ、ロック高圧洗浄機って何に使うのさ……いらないでしょ」

『でつでも……あの値段で……』ピンポーン」

「あ、ミソラちゃん来たかな？」

ドアを開けると眠そうなミソラが今できる満面の笑みをした

「おはようスバル君 いこっか？」

「うん、母さん行ってくるよ〜！」

「は〜い、行ってらっしゃい」

そしてベイサイドシティのミソラの家に行くのであった

↳ 謎の大陸

「ポセイドン様、ムーの生き残りとやらが来ました」

「そうか……通せ！」

「しかし……」

奥から白い髪の少年が来た、

「ふん、貴様がポセイドンか。オリハルコンはどこだ」

「答える義理もないわい、用事はそれだけか」

「ああ、教えないならこんど奪いに来る・・・」

「はははっ！おぬしごときに奪えるかな？」

「ふんっ」

そして白い髪の少年は去っていった

「ポセイドン様なぜあの男を通したの？」

「・・・いや、やつは何か組織について知っているかと思つたのじやが・・・」

（闇の組織）

「ハイドとやらをロックマンの元へ向かわせとけ」

「Z様・・・やつは弱いから勝てぬぞ・・・」

「トート・・・いや？、やつにはロックマンのデータを取っても
らじ」

「所詮は捨て駒ってか、ブラックよ」

「＼＼いつの間にか？まあいい準備させておけ」

「はっ」

「さてロックマンどうでるかな」

そしてまた闇に消えた・・・

ミソラの家に行く朝（後書き）

次もすぐ書きたいな

ミニラボ（前書き）

明日から学校か・・・

ミソラ宅

「ベイサイドシティミソラ宅前」

「うわ……でっかくない」

「ミソラの家は超高層ビルの一室だった」

「よし、入ろうスバル君」

「ガードウィザードに暗証番号を確認してもらい中へ入った」

「ホテルみたい……（ミソラちゃんはやっぱりトップアイドルなんだよな……）」

「んじゃ、うちの部屋行こう」

「ミソラの部屋」

「……（ピンクばっかだな）女の子の部屋ってこんな感じなのか？」

「ミソラの部屋はピンクを基調とした部屋だった、」

「どうかな？」

「あ、うん（何て言えばいいんだ？）」

「返答に困っているスバル、とそこで」

『ふふふっ、スバル君照れちゃって』

「いついや照れてないよ……」

顔を赤くするスバル

「飲み物持ってくるね」

ミソラは飲み物を取りに行った

『ケツ、俺は来る意味なかったかもな』

「そう言わないでよロック、ほらハーブもいるんだしさ」

『スバル、俺は地獄に行きたくないぜ……（何か電波を感じる……）』

『それじゃあ、今日は天国にいきましょうか』

そんな感じ？でロックは連れて行かれたのであった

「ス〜バ〜ル〜君、飲み物持ってきたよ」

飲み物（紅茶）を飲みながら楽しそうに会話をする二人だった……

「ふふふっ、私の脚本が出来上がったぞロックマン」

二人に危機が迫っているとはまだ誰も知らなかった……

ミソラ宅（後書き）

ハイドが次出ます

ファンタムブリック現る(前書き)

ハイドゥってじじいじいぢですよね

ファントムブラック現る

くロック&ハーブ

『おい・・・どう思うこれ?』

『状況は最悪ね、早く二人に知らせなきゃ』

二人の周りには大量のウイルスがいた、軽く2000匹は超えるだろう

『(この電波、ハイドじゃないか?)おい、お前はおかしな電波を感じないか?』

『うん、前に会ったことがあるような気がするわ』

二人は急いでスバル&ミソラのもとへ向かった

くスバル&ミソラ

「ところでなんでミソラちゃんはコダマタウンの中学校来たの?」

「えっ!(スバル君がいるからだよ)いや、こっちの中学校は私立だしさ・・・」

「へえ(まさか僕がいるからはないよな)」

そんな会話をしているときにロックたちが到着

『おい！スバル！ウイルスが大量発生してるぞ』

「え！分かった行こう、トランスコード003、シューティング・スター・ロックマン」

「ハープ私たちも行こう トランスコード004 ハープ・ノート」
（ホテル玄関）

「いくよ、ハープ・ノート！ キャノン プラズマガン」

両手を銃に変えどんどんメットリオを倒していく

「ハープ私たちも行くよ ショックノート」

二人は5分もしないうちに200匹ぐらいのウイルスを全滅にした、が・・・

『おいスバル、あいつだ！ハイドの野郎だ！』

「ふふふっ・・・ロックマンいいアドリブだ、しかしこの主役がお前を倒す」

「こい！ハイド！ミソラちゃんさがってて」

「うん（スバル君なら勝ってくれるよね）」

「行こうロック」

『おう 腕がなるぜ』

「ふふふ勝てるのかな？ ロックマン・・・」

そしてハイド戦が幕を開ける中・・・

「ハイドのやつ、俺の命令を破りやがって・・・死刑判決だな」

闇の組織の幹部、Yというローブを被った男は遠くでそうつぶやいた。彼の手には人形劇などで使う道具が握られていた・・・

ファントムブラック現る(後書き)

Yはこのストーリーで重要なんで忘れないで覚えておいてください

ファントムブリック戦(前書き)

眠いっすな

ファントムブラック戦

「ミソラのマンションの玄関フロア」

「バトルカード ロングソード！」

「フフフハハハ！ファントムクロ」

お互い一歩も譲らぬ二人、しかしブラックには余裕がなくギリギリといったところだ

「くそ！もう一回だファントムクロ！」

ブラックが仕掛けたがロックマンはすぐにかわす

「エドギリブレード！ ワイドソード！」

今度はロックマンから攻める、2刀流の連続攻撃だ

「くそ……」

流石にブラックも受け切れずくらってしまっ

「まだまだ……！」

しかし打たれずよく再び攻撃を仕掛けてくる

「ロック！らちが明かないけど、ノイズチェンジできないしどうする？」

『このまま続けりゃ、そのうちすきを突いて勝てるだろ』

二つの影はまた衝突し、それを一人ポツンと見守るミソラ

「スバル君ならきつと勝てるよね」

『負けるわけじゃないの』

「わたしの・・・私の脚本は完璧だ　！！！！」

「僕だつて負けるわけにはいかないんだ！バトルカード　インパクトキャノン！」

インパクトキャノンを打たれたブラックは飛ばされ、二人の間に距離ができる

「私は負けない！！！！ファントムスラッシュ！！！！」

『来るぞスバル！』

「うん！これで最後だ！」

ズバツとファントムスラッシュがロックマンを切ったと思いきや・・・

「バトルカード　ヘンゲノジュツ　終わりだハイド！！！！」

「なにつ！ぐつ・・・」

ブラックは負けてうずくまる、

「ミソラちゃん終わったよ・・・帰ろう」

「うん」

二人が帰ろうとしてる時ブラックは

「くそ・・・私の脚本は・・・かん・・・」

電波変換を解かれたハイドは、マンションのまえで倒れていた

「見苦しいなハイドよ」

ロープをはおり、十字架の仮面の男は言った

「なっ、マドローラ・・・様、なぜここへ」

「おい、俺の取ってこいといった品は・・・」

「（まずい忘れてた・・・くそっ）次は必ず取って「バン！」」

「お前は用済み・・・でもまだ使えるな」

というマドローラという男はハイドの髪を一本ぬきとった

「ぐっ、何をする」

「ふっ、人形劇を始めるだけだよハイド君・・・」

男はほほ笑んだそして、糸のようなものを巧みに動かしていく

「まっまさか、それは……」

ハイドは無理矢理操られ電波変換させられる、そして、人形劇の人形のようにぎこちなくミノラの部屋へ向かわされて行った……

「第二ラウンドだロックマンよ……」

ファンタムブリック戦(後書き)

マドレーラ怖し・・・マドレーラ=Yです

人形劇の始まり始まり(前書き)

・・・(書くことない)・・・

人形劇の始まり始まり

（ミソラの部屋）

「玄関だいが壊しちゃったね・・・」

「大丈夫だよ、ロックマンは世界を救ったヒーローなんだから」

照れるスバル、しかしこの時この部屋いやビル自体が大変なことになるとは思ってもいなかった

「スバル君いつ帰るの？暗くなってきたけど・・・」

「えっ、早く帰った方がいい？」

「え、うん、いやスバル君のお母さんも心配してるかなって（時間言わなきゃよかった・・・そうしたらスバル君ともっと一緒に入れたのに・・・）」

「大丈夫だよそこは、なんか母さん機嫌よくてメールにこんなこと書いてきたし」

（スバルへ）もしよかったら今日はミソラちゃんの家泊まってくれば？今日は結婚記念日だから、大吾さんと二人で食事に行くつもりだったから それに付き合ってる二人の時間を邪魔するわけにもいかないしね あかね」

「・・・（スバル君と二人きりの夜・・・うれしい）」

「あ、でも迷惑だよね・・・そのうち帰るよ」

「いっいや、私も独り暮らしでさみしいし泊って行ってもいいよ・・・」

「（うそだろっ！母さんの冗談が現実には？）でっでも・・・」

顔を赤くする二人、いい雰囲気になってきたところへやつは来る・・・

『（ん？ハイド？）おいスバルハイドの電波がする・・・』

『全くあんたは空気読めないの？（でも確かに・・・）』

その時！

「ガッシャーン！！！！」

「スバル君後ろ！」

後ろを振り向くとガラスを割ったハイドが宙に浮いていた、しかし何かおかしい・・・

「ハイド！いや、ファントムブラック勝負はついたはずだ！」

「ぐっ（クソこのままでは死んでしまう）た・・・すけて・・・くれ」

「えっ？なんで苦しそうな、スバル君なんかした？」

「いや、何もしてない・・・」

ブラックはその時操られるようにして、苦しみながら攻撃してきた

「ロック！なんかおかしいけどやろう！ ロックバスター」

直撃だった、普通ならここで倒れる、はずだが

「ぐっ、まずいこのままでは俺ごと爆発する（ロックマン・・・聞け、がふっ）」

「なに？（おかしいぞ何か）」

とブラックは身を覆っているマントをとった、そこには時限爆弾が・・・

「こいつが・・・爆発する前に俺についてる・・・電波の糸を切れ・・・」

血を吹きながらブラックは言った

「ロック電波の糸ってなに？」

『こつちの世界でいうピアノ線見てーなやつだ』

「どこを切ればいいの？」

『わかんねーよ俺は』

そんなやり取りをしていると時限爆弾爆発まで残り1分になる

「まずい！ミソラちゃん！このマンションの人を全員避難させて」

「スバル君は……」

「僕はこれを取り外す努力をしてみる、腐れ縁だけどこの人を見捨てれない……」

「スバル君……（何て優しい）……わかった 頑張つて、ムチャしないでね」

『ケツ、こんなやつをなんで救わねーといけないんだよ！』

「僕にも分ないけど……助けを求める人がいたら救うべきじゃないのかな」

「クツ、貸しが一つできたな……ロックマン……俺の、俺の頭上を切ってくれ」

「わかった、ソード！ えい！」

電波の糸は簡単に切れた、しかしここで問題が発生する

「クソっ、この時限爆弾が取れない……」

『どうすんだスバル、残り30秒切ってるぞ！』

「わかってる、……あつ、コードが二つある……これって」

『よくあるパターン！どちらかを切る……赤と緑か……』

赤いコードと緑のコードを目の前に悩むスバル

「一か八か、僕は緑を切る!!!!ウォ バトルカード ソードフ
アイター!」

時間は残り3秒を切っていた・・・そして緑のコードを切った

「頼む!!まだ死ねないんだ!!!!」

「(ここでスバルを守れなかったら大吾に合わせる顔がない・・・)

」

「(気絶中)」

しかし運命とは無情なものである・・・

「ピー!爆破コード切断確認、5秒後爆発します!」

「まずい!!!どうしようロック?・・・いい人生だった」

『バッキヤロウ!!!スバル!!!死ぬな!!!!』

「(気絶につき無言)」

とここでハイドから爆弾が外れた、おそらくコードを切ったから
だろう・・・

「ロック・・・ありがとう今まで・・・」

『スバル・・・』

人形劇の始まり始まり（後書き）

続く…

爆発の傷跡（前書き）

早く寝たい・・・これ書いたら寝る

爆発の傷跡

（ミソラ視点）

ビルのまえで祈っているミソラに最悪の光景が・・・

「ドカーン！！！！ガラガラ！！！！」

なんとこうすビルそのものが崩れ去ってしまった、スバルは爆心地の中心だったろう

「（スバル君ひどいよ・・・私一人残して死ぬなんて・・・）ぐすつ・・・」

『ミソラ・・・（ロックも死んじゃったわね・・・）』

そんな時マンションの住民たちはひとつの方向に指をさして叫んだ

「……………ロックマンだ！！！！」

そこにはハイドを抱きかかえ帰ってくるヒーローの姿があった

「（スバル君！）ぐすつ、うっ……………」

ミソラはその場にへたり込んだ、スバルにもしものことがあったらと思ったからだ

「スバル君……………ぐすつ」

降りてきたヒーローに抱きついたミソラ、

「約束は守るよミソラちゃん、絶対に！」

『しかしスバル、よくあんな状況で頭が回ったな……』

〈回想（爆発の瞬間）〉

「ロックありがとう今まで……」

『えんぎでもねーこと言うな』

「いや、最後まで聞いて……そしてこれからも宜しく！ バトルカードスーパーバリア！」

『スバル……その手があったか』

「うん……でも、僕はダメージを少しはくらったよ」

『なんで?』

とロックが言うとスバルはバリアをハイドにかけ自分はガードした

『ムチャヤしゃがる……』

〈通常視点〉

ロックがそのことを説明しているとスバルは電波変換が解け倒れてしまった、みると全身傷や火傷だらけだった

「スバル君！目を開けて！お願い！（いやっ、こんなお別れ・・・）」

「大丈夫だよ・・・それよりハイドは？」

『消えた・・・さっきまでいたんだがどこかへ姿をくらましたな』

「そう・・・か・・・無事・・・だったみ・・・たいだ・・・ね・・・」

「スバル君！！！！ぐすっ、いやだよこんなの・・・」

『早く起きやがれスバル！おい！』

「ハーブ！救急車を・・・いや電波変換よ、私が運ぶ！」

『わかったわ、ミソラ！』

そうしてミソラの家は全壊^{マンション}、だが何とかスバルは一命を取り留めたのであった・・・

「ふふふ、こうこなくっちゃね。次はどうしよっかな？・・・響ミソラ・・・彼女を使うか・・・」

マドローラはそう言うと、ミソラの写真を見てにたつくのであった

「この貸しは必ず返すのが、私の新しい脚本かな・・・ぐっ」

ハイドは、大けがをしながら闇に消えたのだった

爆発の傷跡（後書き）

ハイドはいちぢきてきにいいやつ（？）（？）になるのかね？

マドローは怖いっすねー

んじゃまた明日更新予定です

感想待ってるよ¥（owo）／

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着し、うとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4615z/>

流星のロックマン 4 ~ ?? mystery ~

2011年12月19日00時49分発行